

新しい時代の茶の湯(茶道)

山北工業クラブ元事務局長
渋谷英昭

はじめに

茶の湯に関心のない方 または お茶を習ってみようかな という方に

自分の専門以外に世の中の色々なことを幅広く知っていれば、多くの分野の人たちとの人脈ができ、人間の巾が広がり、人生が豊かになります。しかし、むやみやたらに何でも知るという訳にはいきません。

とかく、人は自分の関心、興味のなことは知ろうとしません。そこで、今まで関心、興味を持たなかったことにも関心、興味を持つようになる方法があります。それは、**茶の湯**を少し勉強してみることです。

今まで関心のなかったことも違った目で見えるようになります。とはいえ、**茶の湯**はなんとなく敷居が高く、とっつきにくいと思う人が多いでしょう。そこで、先ず**茶の湯**に接する方法として、自分の仕事、趣味、これからやってみたいと考えていること等から入ってみてはいかがでしょうか。

例えば、陶芸をやっている方は茶碗など陶器の茶道具を、また草木の花などが好きな方は茶席の茶花を、書道の好きな方は床の間の掛け軸の書を等々です。

「茶の湯」は後に記すように、美術、工芸、飲食から宗教（禅）まで非常に広い分野から取り入れたものが多々ありますので、**老若男女どんな方でも必ず接点がある**と思います。

このような「茶の湯」の一端を以下に紹介します。

茶の湯の歴史

遣唐使が、中国との間を往来していた奈良・平安時代に留学僧が唐より仏教（禅）と共に持ち帰ったのが我が国のお茶の始まりとされています。この頃のお茶は非常に貴重で、僧侶や貴族階級などの限られた人々だけが口にすることができました。

その後、鎌倉時代には僧侶たちの間で茶を飲む習慣が盛んになりました。これが禅僧と交渉の多かった武家の間に流行し始めました。

さらに、足利時代にはこの習慣が室町将軍家の書院茶の湯として武家階級に非常に流行しましたが、それは華美に流れ遊戯化さえされるようになったのです。

この時代は盛大に茶会が催されて、後の茶会の形式がこの頃から少しずつ形づくられていきました。

15 世紀の後半に至って茶の湯は大きな展開を遂げます。前に記したよう

な派手な風潮に対し、室町中期に、草庵式のわびた茶の湯を創作しようとする茶人たちが現れました。それまでは、さほど精神性には重きを置かれず、飲茶を主体とし、茶道具を美術工芸品としての鑑賞を主体とした茶の形態から、精神性を前面に出した茶の湯が芽生え始めました。村田珠光(むらたじゅこう)、武野紹鷗(たけのじょうおう)がそうであり、この精神を受け継いだのが千利休です。利休は信長に仕え、次いで秀吉に仕えました。彼は桃山時代の豪華絢爛たる文化に対して、簡素な中にわび、さびの世界を確立し山中の庵を思わせる素朴な意匠「市中の山居」を取り入れ、現在の茶室の形式が造られました。

そして、明治維新により、将軍・大名が廃止になり、四民(士・農・工・商)平等の世の中になり、将軍・大名の茶道として幅をきかせていたものが衰退し、三千家(表千家、裏千家、武者小路千家)に代表される町人の茶道がこれによって変わり、茶の湯の趣向が近代化し、一般の町人達にも茶道への関心が高まってきました。そして各流派の家元を中心に、茶事、茶会が盛況になり今日にいたっております。

もてなし と 思いやり の文化

茶の湯は、亭主(主人)と客が茶を通じて思いを伝え合うこと、即ち亭主は「お客をいかにもてなすか」、客は「亭主のもてなしの心をいかに汲み取るか」という思いやりの思想と姿勢が一貫して流れている「もてなし と 思

いやり の文化」であります。

例えば、亭主がある茶会を行う場合、亭主は招待する客の好み、人柄等に合わせて茶会の趣向を考え点前、道具等を選びます。これに対して招待された客は自分に対する亭主のそれらもてなしの趣向を感じ取りそれに応えます。このようにして茶の湯を通して主客の心と心が触れ合い、お互いの思いを伝え合います。人間関係が希薄になりがちな現代においては、この思いやりの心が特に望まれます。

四季の変化を楽しむ

春夏秋冬が明確な日本にあって、自然の美しさ、花鳥風月を愛で、四季の移ろいを味わうことにより、日本独特の情感を育ててきました。

特に 茶の湯 は、季節感を重視し、暑い季節には涼やかに、近くの谷から汲んできた名水を用いた点前があり、寒い時期には温もりに留意し炉の火を出来るだけ客に近づけるように趣向を凝らし楽しめます。

床の間に目をやると、季節感あふれる軸と花があり、茶道具には、四季折々の季節を表現したものが使われ、その季節にふさわしいお菓子が出されます。

このように、茶の湯では、移ろい行く四季の一瞬一瞬の変化を敏感に感じ取りそれを、種々の形で表現します。

例えば、小堀遠州(利休の弟子)がこよなく愛した「四 酔」

春は 花 に酔い、夏は 風 に酔い、秋は 月 に酔い、冬は 雪 に酔う。

というように四季の移ろいを楽しみ、大切にします。

調身（ちょうしん）・調息（ちょうそく）・調心（ちょうしん）

私たちが生きているこの時代は、あらゆる情報があふれかえり、社会はめまぐるしいほどのスピードで変化し続けています。その中であって、誰もが多かれ少なかれ心の平穏を失っています。仕事がつらい、人間関係がしんどい……等々。日常的に抱えているそうした感覚は、平穏さを失い、安らかでいられなくなっています。そのような思いは今を生きている人々に共通するもの、しかも切なるものです。

坐禅の三要素「**調身**」「**調息**」「**調心**」という言葉があります。姿勢を整える、呼吸を整える、心を整えることを表しています。すなわち、姿勢を整えると、呼吸が整う、姿勢、呼吸が整うと心も整ってきます。これは**茶の湯**にも言えることです。というよりも「茶禅一味」と言われるように、無心に茶を点てるのは、無心に仏道修行に励むのと同じであります。

茶碗の前に、じっと静かに座って茶を点てる、みずからの心の内を見つめる、座っているあいだは、心を騒がせる様々な情報や心がとらわれがちな世の中の変化から離れていられるのです。心はどんどん穏やかに安らかになっていきます。

茶の湯で感覚を磨きましょう

— 知識に加えて、**感覚**も磨けば、
ものごとの真価に近づく —

江戸時代から明治になって、その後の150年、日本人の意識は外国に向いていて、暮らしは欧米化したけれど、人間が作り出した科学技術の発展によって、逆に人間本来の感性、直観力が失われつつあります。

今の人は、自分の感覚よりも、知識を頼りにしています。知識は、信じやすいし、人と共有しやすい。誰しも、学ぶことで知識を蓄えることが出来ます。

例えば、美術館で絵画を鑑賞するときも、こういう時代背景で、こういうことが描かれていると、解説を頭にいれます。そして、解説のとおりであるかを確認しながら鑑賞しています。しかし、それは鑑賞ではなく、頭の学習です。

鑑賞を心から楽しむためには、感覚も必要です。最近では、感覚を磨いている人は非常に少なくなっているように思われます。感覚は、自分で磨かないと得られません。

絵画を鑑賞するときは、解説は忘れて、絵画が発しているそのものを、直接自分の感覚の一切で包み込み、受け止めるようにします。

茶の湯では、茶会などで出された茶を飲む際は、まず茶碗の形、模様、色、手に乗せた感触、そして飲む時の口ざわり、茶の味、温度等を自分の五感で感じ取ります。このようにして、感覚は、自分で磨けば磨くほどそのものの

真価を深く理解できるようになります。

感覚を磨いている人は、日常生活においても、有利に働きます。まず、間違いが少なくなります。知識や経験に加えて、感覚的にも判断することができますので、身の回りの危険、トラブルなどを察知し、さっと上手に避けることができます。

昔は人間にも動物的な勘が備わっていましたが、文明の発達で、勘を使わなくても生きていけるようになったので、鈍ってしまったと言われています。

「虫が知らせる」「虫が好かない」という表現がありますが、虫というのは感覚。自分のなかに虫がいて、それが非常に感覚的に優れていたから、虫にたとえた言い方をしていました。

世の中の風潮は、頭で学習することが主体で、自分の感覚を磨く、ということはおざりにされています。たいへん残念なことです。

茶の湯は、この感覚を磨くのに最適です。

心と体全体を使って茶の湯を楽しみながら感覚を磨きましょう。

人生を豊かにする

茶の湯は、豊かな四季の自然に囲まれ、長い年月をかけて育まれてきた日本特有の文化で一碗の茶を通して人と人をつなぎ、色々な分野の人々との交流を広げることができます。また、自らを穏やかな、そして洗練された非

日常の世界へ引き込み、忙しい悩み多い日々の生活から隔離し、新たな境地への英気と活力を養ってくれます。

茶道などの芸道の奥義とは、真理へ辿り着く道筋に繋がるという高い精神性が示されており、その根底には、芸を極めることは、すなわち人間性を極めることという考え方があります。

このように 茶の湯は、人間の巾を広げ、人間性を高め、人間らしい生き方を追求し、人生を豊かにします。

総合的生活文化

日本の伝統文化の粋（すい）といわれる茶道は、一碗の茶を飲むというごくありふれた生活上の行為を文化のレベルにまで高めた不思議な生活芸術であり、

書（墨蹟、掛け軸）、焼き物（陶磁器）、塗り物（漆器）、金工、竹細工、香、詩歌、建築（茶室）、庭（茶庭、露地）、花（四季の茶花）、菓子（季節の和菓子）、料理（懐石料理）さらには 禅、陰陽 など 巾の広い面を持ち、それらが渾然一体となった「総合的生活文化」であり、人間の五感のすべてを駆使して、それらの趣向を感じ取り楽しめます。

このような生活に密着した文化は、世界中でも他に例がありません。

そして、この日本古来の「寂び」「おもいやり」「やすらぎ」等、日本的感性に基づいた心の文化（茶の湯、禅、能など）が、近年、世界各国から認められるようになってきました。

茶の湯 と 異業種交流

茶会は、さまざまな機縁によってさまざまな分野の人と人とが出会い、一碗の茶をはさんで「人と人が直接五感のすべてをぶつけあって、互いに思いを伝え合う」場であります。即ち、一種の **異業種交流** です。

茶人が茶の心を言い表す**一期一会**とは、そんな束の間のかけがえのない出会いのことを言うのです。

近代 小田原の三茶人 がこのよい例です。その中の

益田鈍翁 は大実業家（三井物産 設立）であり、また「**利休以来の大茶人**」でありました。そして、茶の湯を通して実業家、政治家、芸術家、軍人等多分野にわたり、非常に多くの人達と交流がありました。例えば、

野崎幻庵（三茶人の1人） 中外商業新報（後の日本経済新聞）社長。

松永耳庵（三茶人の1人） 電力王 九電力の民営化に貢献。 居宅は小田原市に寄贈して、現在の『**松永記念館**』。
原 三溪（富太郎）生糸貿易で財を成した実業家であり、古美術と近代日本美術の収集家で **横浜の三溪園**の造園でも有名。

高橋箒庵（義雄） 三井呉服店（三越）の経営近代化を行う。50歳で実業界を引退し、以後は茶道三昧の生活を送る。

根津青山（嘉一郎） 東部鉄道の社長。

畠山即翁（一清） 荏原製作所創業者。

正木直彦 東京美術学校（東京芸術大学）校長。

小林逸翁（一三） 阪急電鉄、宝塚歌劇団の創業者。

五島慶太 東急電鉄の創業者。

等々・・・・・・・・

茶の湯とパソコン

— **千 利休とスティーブ・ジョブズ** —

利休とアップルの創業者**ジョブズ**は、**3つ**のとてもよく似た面を持っていると思います。

その1つは

利休 は、それまでは上流階級の豪華な遊興的な茶の湯を、一般大衆にも手の届くような草庵の茶の湯にし、更に、一碗の茶を飲むという、ごくありふれた日常生活上の行為を生活芸術にまで高め、精神面でも、主客のおもいやり、一期一会、和敬静寂、四季の自然を楽しむ等侘び寂びの現在の茶道の基礎を作り上げました。

一方、**ジョブズ** は、それまでは大企業や公的機関が使う大型の高価な機種であった電子計算機を、一般大衆にも使えるようなパソコン（パーソナルコンピュータ）に、更には スマートフォン にまでしました。そして「ただ技術的に優れているとか革新的とかではなく、見て美しく芸術性がある、しかも人間のライフスタイルを変えるようなイノベーションを目指して居る」 と言っています。

2番目に

この2人とも、後継者、弟子達に **自分を超越る挑戦者であることを求めています。**

3番目には

ジョブズは、日本の文化に関心を持ち日本食を好み、さらに若い頃から禅

に傾倒し、禅宗の僧侶 乙川弘文 を精神的指導者と慕い、新製品の開発、技術、経営にも、日本の文化、**禅の心**を取り入れ、しばしばスピーチに**禅の教え**を引用しました。利休の茶の湯も、**禅**とは密接な関係があることは周知の事実です。

このように考えると、この2人は、それぞれ前記のような共通点があり、その時代の一般常識では考えられない飛びぬけた存在であったという共通点がみられます。

もし現代に利休が生きていたら、ジョブズのような面影があるのではないかと……とは考えすぎでしょうか。

新しい時代の茶の湯

もともとは、中国から渡ってきた茶道を、完全に日本文化の一つとしてしまい、現在では**日本文化の代表的なもの**になりました。そして、世界中が大きく変革している昨今において茶の湯も新しい時代に合った行き方をしなければなりません。

国境が低くなり、様々な国の人たちが入り混じり合っていく時代だからこそ、日本の芸術と文化を学び直したいものです。

日本には素晴らしい芸術と文化があります。その中でも総合芸術としての **茶の湯**は日本が未来に向かって発展するための有力なものです。

日本の文化を未来へと引きついでいくこと、それは、**日本の文化と伝統の象徴**ともいえる、茶の湯を、古くからの**伝統と文化**を大切にしながら、今

の時代に合わせ、日本人特有の繊細な気遣い、匠の業に代表される技などを一層深め、それらを通じて、**新たなものへと進化させ**世界に貢献できるような茶の湯に発展させたいものです。

腰掛式茶の湯

現在の茶の湯を**若者達男女**、更に、**外国人達**をもっと引き付けるような魅力あるものにする努力が必要です。

その一例として

椅子に腰掛けて行う **腰掛式茶の湯**、立礼（りゅうれい）があります。最近は畳の上に正座することができない人が多くなっていますので……これをもっと広く普及・発展させてはいかがでしょうか。

茶の湯 + ? の コラボ

前に記したように茶の湯は、非常に広い分野に関係しておりますのでその広い分野の方々と、更には全く違った分野の方々との**コラボ(連携)**により、従来の常識から大きくかけはなれた、意外な**モノ、考え、行動**等が生まれる可能性を秘めております。それらにより新しい時代の茶の湯を探索したいと思います。

これらについてのご意見、アイデア等を是非お聞かせいただきたくお願い申し上げます。

参考文献

「茶道の哲学」 久松真一著、藤吉慈海編 講談社学術文庫 813 (1992)

「茶道の歴史」 桑田忠親著、講談社学術文庫 453 (1999)

「茶道の源流 第1巻 歴史編」淡交社 (昭和58年12月)

「茶席の禅語」 有馬頼底著 主婦の友社 (平成4年)

「わが家の庭づくり」 p.104 主婦と生活社 (昭和62年)

「茶の湯と日本文化」神津朝夫著 淡交社 (2012年)

「茶の精神」 千宗室著 茶の湯ライブラリー① 淡交社 (昭和44年)
茶の湯人物伝「小堀遠州」 村井康彦
(淡交タイムス 2013年5月)

「茶の湯と中国文化」関根宗中 (淡交 2012年1月～12月)

「生きるのがラクになる椅子坐禅」
枅野俊明著 小学館 (2015年)

澁谷 英昭 (しぶや ひであき)

1929年生まれ。早稲田大学理工学部卒業後、鉄鋼会社に約40年勤務し、鉄鋼の製造、生産技術、生産管理、品質管理、工場建設、新素材の研究開発等にたずさわり、また技術士(金属部門)の資格を取得。鉄鋼会社退職後、神奈川県足柄上郡山北町のものづくり異業種グループ「山北工業クラブ」(イグレン会員)の事務局長として約20年間、異業種交流、講演会、見学会、展示会等の企画、運営にたずさわった。また、当家で代々行っている茶の湯教室を、腰掛式にするなど茶の湯の近代化を進めている。

連絡先

〒258-0003

神奈川県足柄上郡松田町松田惣領1556

電話：080-3007-2148

Eメール：hideaki_shibuya@yahoo.co.jp

「腰掛式茶の湯の一例」



立礼(炉) 点前坐で主人が釜より湯を酌んでいるところ



立礼（炉）薄茶点前 左 主人 右 お客



立礼（炉） 客席全体 右下 釜のかかった炉